

## 潮流

# 『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』と気候変動

主席研究員 山口 勝義

うっかりすると、マルクスがこの書名の中に埋め込んだ「ねじれ」を見落としてしまうかもしれない。ここで「ブリュメール十八日」はナポレオン（後のナポレオン一世）による1799年のクーデタであるのに対し、「ルイ・ボナパルト」とは、1851年のクーデタで実権を握り後にナポレオン三世を名乗る、ナポレオンの甥のことである。しかもマルクスは、ヘーゲルの「全ての世界史的大事件や大人物は二度現れる」とする言葉を引いたうえで、「彼（ヘーゲル）は、一度目は悲劇として、二度目は茶番として、と付け加えるのを忘れた」と述べている。つまりマルクスは、凡庸であるにもかかわらず偉大なナポレオンによる革命を真似たとして、ルイ・ボナパルトを揶揄しているわけである。もっともマルクスは、このルイ・ボナパルトと同時代を生きた人間として、あくまで彼が独裁制を樹立するに至った歴史上の必然性を論じるどころに、本書の主眼を置いている。

マルクスによれば、この必然性は、この時期にプロレタリアートが影響力を拡大するにつれブルジョワジーが保守反動化した歴史の流れの中に求められるとしている。その詳細はともかくも、正に19世紀のフランスは近代国民国家の樹立に向かう激動のただ中にある。フランス革命の後にも、七月革命、二月革命を経てパリ・コミューンに至るまで、第一共和政、第一帝政、復古王政、七月王政、第二共和政、第二帝政、第三共和政と、目まぐるしい政体の変遷を経てきている。その背後では、王朝派、共和派、社会主義派に属するブルジョワジー、中産階級、プロレタリアートなどが、しかもそれぞれが分派に分かれ相互に複雑に絡み合いながら、政治力の発揮を狙っていた。こうして幾多の曲折を経ながらも、英国を追いつつ本格化する産業革命に市民革命が加わることで、19世紀のフランスでは資本主義の発達に一段と弾みがつくことになる。エンゲルスも本書に寄せた序文の中で、フランスは階級闘争を通じて資本主義の発達を見た典型的な国であると位置付けている。

さて、この資本主義なのであるが、実は今、歴史的な見直しが提起されている、しかもその端緒は気候変動にある、と言えれば意外感があるだろうか。気候変動対策に当たって脱炭素への取り組みのみでは不十分である、同時に、豊かさとは何かという価値観の根源に立ち返り、自然環境を含む資産や持続可能な経済の価値を評価する新たな枠組みを確立する必要がある、との主張である。従来のGDP成長率はこれからの時代の要請には適合しないと、資本主義を巡るパラダイムの転換を求めている。これらの論点については、なかでもケンブリッジ大学のダスグプタ名誉教授による“Dasgupta Review”（英国財務省のホームページに掲載されている）が、包括的に検討の方向を示し議論の深化を促している。

ところでルイ・ボナパルトについては、近年、再評価が行われているようである。軍事的栄光を第一としたナポレオン一世に対し、ルイ・ボナパルトはナポレオン三世として普通選挙を通じ民主主義を推し進めるとともに経済成長を実現したとして、今では肯定的な評価が広がっている。同様に、脱炭素時代の資本主義のあり方についても、視点を転換し、現代的な価値尺度で改めて見直しを行う必要があるということになるのだろう。パリ協定では平均気温の上昇を産業革命以前の対比で一定の範囲内に抑えることを目標としているが、資本主義自体についても、いわば産業革命以前の視点に立ち返り再検討が迫られているわけである。私たち一人一人も、気候変動対策は単に物質上の問題ではない、価値観に関わる精神上的な取り組みでもあることを、今一度、確認する必要があるということであろう。